

元禄六（一六九三）年

（五月九日）

一、竹嶋江大屋九右衛門・村川市兵衛舟、今歳渡海之節、彼嶋二朝鮮人獵仕罷有付て、其内式人舟乘罷帰候由申来、朝鮮人口上書、并大谷・村川口上書等参也。明朝御月番之御老中江吉田平馬、右之口上書等持参仕筈也。委細は来ル十五日之記有之。

（五月三日）

一、今度竹嶋江参候朝鮮人之内式人、大屋・村川船頭、米子へ同船にて召連罷帰候付、先日御老中江御伺被成候処、今日土屋相模守様より御家来忝人御差越被成様被申越、吉田平馬罷出候。然処、彼唐人長崎江被遣、御奉行所江相渡、右之段々申達候用被仰渡、為御請小谷伊兵衛即刻被遣之。

（五月一日）

一、伯州米子町人大屋九右衛門・村川市兵衛、例年竹嶋江船頭共為致渡海海炮取せ申候。去年渡海之処、朝鮮人罷有獵仕付、炮取事不成罷帰候処、又今歳渡海候得は、朝鮮人獵仕罷有候故、炮取不申二付、彼朝鮮人之内、通詞老人外老人以上兩人、同船にて米子へ罷帰候。因茲御国御家老より右之趣以飛脚被申越候。就夫、今月十日、早々御聞役を以御月番御老中土屋相模守様江朝鮮人口上書・同持参之（削力）すが・懐中之書付三通、并村川・大屋船頭之口上書共被遣、段々御老中江右之趣被仰入置候処、御聞届被成由にて、同十三日御月番土屋相模守様江御家来被為呼候付、吉田平馬参上候処、彼朝鮮人長崎江被遣、御奉行衆段々之子細被仰達御渡可被成旨被仰渡候。為御請小谷伊兵衛被遣之。但、朝鮮人口上書其外之品々相模守様江被留置候。且又、竹嶋江残居申朝鮮人も一所二長崎江被遣候様被仰渡候処、平馬申上候は、竹嶋と申所江は軽渡海難成所にて御座候。例年二、三月渡海仕、五、六月之頃帰帆之外ハ渡海難成候。其上、村川・大屋船頭竹嶋より罷帰候節、朝鮮人も可罷帰躰御座候間、最早朝鮮人彼嶋居申間敷由、段々申上候得は、御聞届被成由被仰也。

一、右之品々御国御家老江自志摩所申遣、尤御使者ハ御馬廻之内人柄致吟味可申付旨、御意也。御使者参候惣人数之事ハ、去々年春異国船長崎江御送被成節之通可仕哉と、相模守様又（イ）は爰許二御入候。長崎御奉行宮城越前守殿へハ御尋被成候得は、其通可然由二付て、御国江此段申遣。

一、長崎御在番川口撰津守殿・山岡対馬守殿江御書被遣御文言。

一筆致啓達候。然は、拙者領分伯州米子之町人大屋九右衛門・村川市兵衛（甲）と者（脱カ）之船頭、竹嶋江累歳渡海候て獵致候。当春も渡海申候処、彼嶋朝鮮人数多罷有候故、朝鮮人式人令同船罷帰候。此旨於御当地御老中江御届申候処、其許江右朝鮮人送遣、各江相渡候様二と御差図付て、此度使者差副差越候。委細使者口上可申候間、可然様御差図頼入存候。恐惶。

五月十六日

川口撰津守様

山岡対馬守様 被遣物有之。御国にて拵遣ニ付て不記之。
宮城越前守殿は御在府付て不被遣之
一、右長崎御奉行御兩人御使者持参之御口上書写

口上 松平伯耆守

弥御無事御役所御勤可被成と珍重存候。就ては拙者両国伯州米子之町人大谷九右衛門・村川市兵衛と申者、例年竹嶋江炮取、船頭差遣、今年も炮取参候处、彼嶋朝鮮人参居申ニ付、炮得取不申、因茲、右朝鮮人之内式人、同船にて米子江罷帰、船頭共、并朝鮮人口上書之通、御当地ニ差越、則右之趣御月番之御老中土屋相模守殿江御届申入、向後彼嶋江朝鮮人不参候様致シ、炮をもおし通、献上も仕度旨申達候处、御聞届之由にて、右之朝鮮人其許江遣御差図次第相渡候様ニとの儀御座候。且又、右之外ニ竹嶋ニ朝鮮人残居申候者一所其許江相送候様御差図候得共、竹嶋江渡候儀は二、三月之頃致渡海、五、六月頃帰帆申、此外ニは渡海申儀難成海路ニ御座候。其上、船頭共朝鮮人出合罷帰候節、朝鮮人も罷帰躰相見候由被申越候間、定て此節は竹嶋居申間敷と存候故、相殘唐人共之儀は知不申段御断申候处、此段も御聞届候由御座候。因茲、米子江参候唐人式人使者相副差遣候間、可然儀差図被仰付可被下候頼存候。右朝鮮人、(并左) 船頭口上書四(虫損)□□候。御当地宮城越前守殿江も右之段相達候。越前守殿よりも此段其許江御達之由御座候。委細使者口上可申入候。以上。

右之御口上書其俣にて御使者持参差出候筈也。

一、右朝鮮人長崎江被遣様、宮城越前守殿江被仰談候は、大坂迄陸を被遣、夫より長崎江出船可仕候哉。但、又直ニ長崎江渡海可仕候哉。此段勝手次第被成度旨被仰入候得は、其段ハ御勝手

次第之由。因茲、此段御国江も申遣、尤路次にて逗留(虫損)□□は不苦、障之事有之候得は、其段早々

江戸江被申越候様被仰遣。

一、大坂迄陸罷越、夫より出船仕候様子候得は、大坂御在番土岐伊予守殿・松平五郎右衛門殿江御付届入可申由にて御口上、并御書御案詞御国参。

追加、長崎迄陸参候由、御国より申来。

(五月二日)

一、御勘定頭松平美濃守殿より、昨日御留守居参候様申来付て、伊庭七郎左衛門、今日被遣候处、竹嶋之儀委細御聞有之度旨也。因茲、明廿二日、伊庭七郎左衛門美濃守殿江持参仕書付之写。

一、伯耆国米子より竹嶋江海上凡百六十里程有之由候。例年米子出舟、出雲江参、隱岐国江致渡海候て竹嶋江渡申候。米子より直竹嶋江渡候儀成不申候。

一、村川市兵衛・大屋九右衛門、御当地江罷越御目見被仰付候節、竹嶋石決明(船の渡名)献上仕候。

一、竹嶋江(町)て炮取候運上は無之候。伯耆守献上炮も右(兩人之町)□□□□人共江手前より相調差上申候。

一、竹嶋にて海駟取候て、彼地にて油仕取帰候て商売仕候。尤油之運上も無御座候。

一、竹嶋ははなれ嶋にて人住居は不仕候。尤、伯耆守支配所にて無之候。

右之通にて御座候。

- 一、竹島渡海之儀、委細爰許ニテ相知不申候。
- 一、竹嶋渡海付、御朱印は無之様覺申候。併相尋自是可申上候。并御奉書之写も爰元ニ無之候。
- 一、竹島江渡海之舟ニ御紋之船印相立候儀、爰元ニテ相知不申候。
- 一、村川市兵衛・大屋九右衛門御当地江罷下候儀、何ヶ年忝度罷越候哉。其段爰元ニテ慥相知不申候。

右之通国許江申遣、追て可申上候。已上。

五月廿二日

- 一、六月廿七日、伊庭七郎左衛門、松平美濃守殿江持参仕書付、此所ニ記置也。
覺

伯耆国米子町人村川市兵衛・大屋九右衛門、竹嶋江渡海始候儀、元和四年阿部四郎五郎殿御取持ヲ以渡海御免被遊、其節より右二人御目見被仰付候事。

- 一、右嶋江渡海付御朱印は無御座候。松平新太郎伯耆国領知之節、渡海之儀付被成御奉書候。則写懸御目候。

一、右嶋江渡海舟ニ御紋之船印御免被遊相立候儀、不分明候へ共、右二人先祖より至に今相立申候。先年竹嶋江渡海之舟、朝鮮国江流着候節、御紋之舟印立候付、日本之船と見知申、対馬国江送越、米子江罷帰候由、御座候。

一、右町人御当地江罷下候儀、四、五年忝度宛老人替々罷越候。其節は寺社御奉行衆江御案内申、御目見之儀奉願御目見被仰付以後、時服拝領仕由、以上。

(六月十日)

一、御国より先月廿八日之御飛脚到来。先月十八日御嘉例之通御城内御祈禱相濟候御礼来。

朝鮮人長崎江被遣付、御使者山田平左衛門・平井甚右衛門兩人申渡旨也。

但、甚暑之砌長途御使者故若病人有之ため兩人被仰付之。

- 一、医師竹間玄碩被遣之申渡候旨申来、玄碩儀外科本道共ニ相勤候故申渡旨也。
- 一、朝鮮人食物拵候ため二次御料理人耆人申渡旨、且又朝鮮人耆人ニ足輕四人宛副遣之由申来。
- 一、海陸共ニ何れニても御勝手次第可被遣由候故、海上ハ無御心許、陸を被遣之也。
- 一、奉書五束宛長崎御奉行御兩人江被遣之。先年寄舟長崎江御送之時分、毛利惣右衛門被遣節、御音物有之付、此度も被遣。

一、長崎へ御送舟有之節、同所之町人下見助右衛門と申者有之。年肝煎諸事首尾能候付、此度も御頼被成由。先達山崎主馬より書状遣候様御国御家老差函仕、因茲、金子千疋被遣、主馬より相達ス。

(六月三日)

一、朝鮮人自米子荒尾大和宅江引取、翌日より会所差置、去ル七日御国発足申由兼て被仰付、御役人共差副遣候旨申来、達御耳旨志摩より御国へ申遣。

一、朝鮮人米子より鳥取迄参候節、大和組之内鹿野郷右衛門・尾関右兵衛兩人、其外町医も相副召連旨申来。

(六月二日)

一、大久保加賀守殿より御聞役共之内御招付て、小谷伊兵衛遣候処、異国舟之儀付御定之御奉書

被成御渡之。御書被遣之加賀守殿御差図付て、残御老中方江も被仰遣之。

〔八月九日〕

一、山田兵左衛門・平井仁右衛門儀、朝鮮人長崎江送届、御奉行江首尾好相渡、先月廿四日御国江帰着。

但、長崎江罷越候節道中、御領・私領共御馳走有之。六月晦日彼地江参着。翌朔日、御奉行所江相渡候由、長崎御奉行川口撰津守殿・山岡対馬守殿より御返書来り。御国より差越、此御届御老中様之内江御達可被成旨也。御領・私領ニて御馳走之御礼之義ハ、御中陰あきし以後可被仰遣答也。

〔九月九日〕

一、山田平左衛門・平井甚右衛門先頃唐人長崎御奉行所へ首尾好相渡候付て、苦勞仕御意之趣、志摩所より御国御家老迄可申達之由申遣。

一、竹間玄碩、并御歩行方之者共へも、無懈怠相勤罷帰候之旨、被聞召届段、可申聞由申遣

元禄九（一六九六）年

〔二月八日〕

一、戸田山城守殿より御聞役之内御招付て、平馬参上之处、御奉書被遊御渡右之写

先年松平新太郎因州伯州領知之節、相窺之伯州米子之町人村川市兵衛・大屋甚吉、竹嶋江渡海至于今雖致漁候。向後竹嶋江渡海之義制禁可申付旨被仰出之候。可被存其趣候。恐々謹言

正月廿八日

土屋相模守

戸田山城守

阿部豊後守

大久保加賀守

松平伯耆守

一、大久保加賀守殿江右之御奉書参、則山城殿江被遊御請之通被仰入之也

〔六月三日〕

十三日

一、西郡之内、赤崎と申所江異国船老艘着岸、朝鮮人十老人乗居申由、依之去五日御国より津進之脚力今朝到来仕付、公義江先御聞役吉田平馬を以御届之御口上書、左写之。

松平伯耆守

朝鮮之船老艘、五月廿日隱岐国江着岸、依之御代官後藤角右衛門手代中瀬弾右衛門・山本清右衛門様子相尋候处、今度朝鮮船三十二艘竹嶋江渡海仕候。其内老艘、人数十老人罷有候。是は伯耆国江願之儀有之渡海仕旨申付て、右兩人より飛脚を以、右之趣今月二日国元家来迄申越候。同四日伯州赤崎と申浦辺江、右朝鮮船着申候。則番人等申付置候。委細承、追て注進可仕旨、従国元今日以飛脚申越候付、先御届申上置候。以上。

六月十三日

(六月三日)

廿二日

右之通、加賀守殿江被成御届候処、御聞届被成、追ての注進有之候は、可被仰聞由御返答也。

一、朝鮮船赤崎着岸旨付て、早速山崎主馬罷越候之様申渡、主馬罷越候処、舟磯にて出合申候得共、舟磯は所も悪、船掛留候事難成、青屋江引船にて廻し、湊江朝鮮船入置、番船等附置候。前廉隠岐国より申来候は、竹嶋之儀付て、御訴訟参候旨申由之注進に付て、様子承候様二と、平井金左衛門申渡罷越候処、通辞も無之、埒難明付て、辻晚庵青屋江遣旨、晚庵青屋江到着千念寺江あんひちやん其外兩人呼上ケ対談申様子承候処、差て竹嶋訴訟之様二も不相聞候旨、金左衛門・晚庵江承候て罷帰間、船中二有之物之書記も御国より差越候。右之段々、御国より注進申上付て、今日大久保加賀守殿江御聞役吉田平馬を以委細之御口上書、並朝鮮人書記も一所二御差出被遊候処、翌廿三日従加賀守殿平馬御招被仰渡候は、朝鮮人御伺之趣御仲ケ間中江も被仰談候、長崎江御人御添御送可被成候、併長崎江被遣候儀於御国御家来申聞候とも、通辞無之候ては聞込申間敷候、願之儀有之様子二申候ハ、長崎江参候儀承引申間敷候、左様之所随分被遣候、為通辞宗次郎殿御家来、并通辞兩人被仰付被遣候旨被仰渡候。又翌日平馬御招御書付被成御渡候。則御書付御国江従将監相達之。

一、長崎御奉行諏訪兵部殿江、委細朝鮮人之儀被成御達置候。尤長崎御勤番之御同役中へハ、以御書段々被仰遣之。

一、朝鮮人青屋二被差置候ては、居所も悪敷候故、加路江寄廻シ、東禅寺江被入置候段、居所も替たる事候へハ、被仰上可然存、加賀守殿江以御書付被仰入候処、追て御返答可被仰旨二て、翌日平馬御招被仰渡候は、朝鮮人居所東禅寺江上ケ被置候事御無用候。早速御国江被仰遣、其俣船中二被置候様二と之御事二て、御書付御渡候。則写遣候間、御書付之通可被申付旨、将監より御国江相達之。

一、宗次郎殿御家来、鳥取江参候上二て、能々申談、随分朝鮮人吞込候様二申聞、異国より願之儀、外二て御請込被成事二て無之、公義御大法二候之間、とかく長崎江可参候。其上同心不申候は、帰帆可申旨申聞、長崎江も不参、帰帆不申候ハ、其段々其節又御当地江被仰上二て可有之旨、加賀守殿御噂二ても候。右之段将監より相達之。

一、朝鮮人船路陸路被遣候儀被成御伺候処、陸路被遣候てハ、人数も多、所々泊々二て一宿も可致候。左様二候ては悪敷候之間、船二て御送可被成候。尤宗次郎殿御家来も差添可参旨、加賀守殿御差函候。此段も御国江従将監相達之。

但、大久保加賀守殿へ朝鮮船一往之御届、当月十三日記有之、落着之儀八月六日記有之、宗次郎殿より御使者通辞御国へ参候儀、八月十八日之記有之也。

(六月二六日)

廿六日

一、朝鮮人之儀付て、今朝七日割之御飛脚出之。

(七月三日)

廿二日

一、朝鮮人従先頃御国江罷越、小山池之内青嶋江被遣置、番人等附置有之付、此度和田瀬兵衛作

廻ニ被仰付之、於御櫓御家老申渡之。

〔八月一日〕

一日

一、伯州米子之町人村川市兵衛・大屋甚吉江、向後竹嶋渡海之儀制禁被仰出之旨、最前御在府之内被成御奉書、御帰国之上を以、右之段市兵衛・甚吉江被仰渡候様、大久保加賀守御差図ニ付て、今日弥可為制禁之旨被仰付之。

荒尾修理江、此旨可申付之由被仰渡、御奉書之写も修理江御家老より相渡。
追加、村川市兵衛・大屋甚吉江被仰渡、奉畏之旨、江戸御連署を以被仰上之。

〔八月六日〕

六日

一、朝鮮船小山青嶋江御入置被遊候段々、江戸江御伺被成、就夫最前宗刑部大輔殿より御老中江御存寄之趣被仰上候由ニ付て、惣て朝鮮国通用之儀、対州之外御取上ケ不被成御大法ニ候之間、追返候様ニと御奉書出ル。并宗次郎殿よりも、其趣申来付て、先月廿五日、廿六日從江府之兩飛脚、一昨日到着、依之、則一昨日平井金左衛門儀、青嶋へ辻晚庵同道ニて罷越、帰帆候様申聞候。然共、加路小山之川筋、頃日天氣続候故、水浅、船通り兼、掘せ申付て、朝鮮船之出船延引仕、今日加路湊出船仕段見届、金左衛門・晚庵罷帰、登城、此趣御家老迄申達。

一、右朝鮮人拾老共、加路出船仕候為御届、広沢半右衛門江戸江御使者被仰付之。於御書院御目見仕ル。御前江式部罷出。

但、御連署ニ今日朝鮮船出船仕候由之御文言也。

〔八月十八日〕

十八日

一、先日迄朝鮮人御国ニ罷在ニ付、宗次郎殿より御使者鈴木権平并通詞兩人御差越之由、路次より先達て相知候付、御歩行飯嶋武太夫今夕之泊用瀬迄罷越、差留戻し候様ニと被仰出之、御使者権平江帷子三、通詞兩人江金子式百足充、以武太夫被遣之、御断申受納不仕也。

但、右之御使者・通詞御差留被成儀、先日朝鮮人追帰候様ニと公儀より被仰出之、仮令朝鮮人帰帆不仕内ニても、使者・通詞出合候儀無用之旨、大久保加賀守殿より御差図、其上、朝鮮人先日帰帆故、右之三人御城下江不来内、御戻し被成筈ニ相究有之付、右之通也。帰帆之儀、今月六日之記ニ有之。